序文

求道にはさまざまな道筋がある。それを大きく分けると、次の五つに分類することができる。まず一つめは霊界コース、二つめは神仙界コース、三つめは仏界コース、四つめは術界コース、そして最後の五つめは神界コースである。これら五つの道は、それぞれみな地球から宇宙の星へと昇り、さらには根元界と呼ばれる超越世界へと突入していく道である。その根元界からの使者として地球世界に降りて来て、人間にそれぞれのたどる道筋を説いた者がいた。霊界コースのイエス・キリスト、神仙界コースのモーゼス（日本ではモーゼとして知られている）、仏界コースの釈迦、術界コースのプラトン。これらの人々はあまりにも有名であるため説明の必要もないだろうが、前置き程度に触れておこう。

ユダヤ人イエス・キリストはキリスト教の開祖であるが、人間イエスははりつけにされて早死にしたために根元界には戻れず、神霊（精霊）であるキリストのみが、キリスト教を根付かせるという役目を果たしてから根元界に帰った。モーゼスはエジプトで奴隷になっていたイスラエル民族を連れ出したユダヤ教の開祖で、さまざまな奇跡を現したことで有名である。旧約聖書にくわしい記述がある。釈迦は言うまでもなく仏教の開祖であって、われわれ日本人にはなじみの深

い名前である。仏教はインドで開かれアジアの各地で花開いたが、二千五百年後の今日、発祥の地インドでは衰退してしまっている。しかし、二十一世紀を前にして仏教再興の釈迦の衣鉢は、迦葉を介して日本人に授けられた。新しい仏教は日本で花開こうとしている。

ギリシャの哲学者プラトンは、術界（技能界）コースを開くために根元界から役目を与えられた人間であった。このコースは宗教というよりは専門職を貫いてたどる道で、学術、技術、芸術、武術などといった各分野に通っている道である。プラトンはこの道を哲学で切り開いた。プラトンの師であったソクラテスは先導役を勤めた人物であったが、根元界までは届かなかった。この道をたどって根元界に入った人間はかなりいるように思われる。日本では茶の道を確立した千利休が星レベルを越えて根元界に到達している。

神界コースは、二十世紀末の今日まで人間世界で説かれたことはなかった。太古から全世界で語り継がれてきた神話は、地球神界と星の世界までであって、星々を越えた根元界の神々が語られたことはなかった。そのため根元界やそれを越えた無の世界（無元界）、さらには創造界を出した前述の四つのすべての教えよりレベルの低いものと定義されてしまうことになった。しかし、それは星を越えた領域の神々を取り上げなかったからであって、神々の教えがほかの教えに

劣っているということにはならない。その誤解は、根元界に至る神界コースが今日まで説かれなかったところから発生している。

二十一世紀を前にして、日本でついに根元界の扉が開かれて、地球や星々から根元界、あるいは無の領域、さらには創造界に至る神界コースが説き出された。それは人間界にとっても神界にとっても画期的なことで、地球新時代、宇宙新時代へと脱皮する原動力にもなっている。過去神々には根元界への道が閉ざされていた。そのため神々は星々以上の世界を語ることができなかったわけであるが、その禁断の道は数年前人間によって開かれた。その道が開かれたことによって、神々は過去の眠りから覚め、新しい時代へと脱皮しはじめたのである。そのことは地球人間世界をも大きく転換させる動きになっている。

神とは、すべての生命の完成された姿である。求道とは、人が神へと進化する道筋のことであるが、この道は地球神界や宇宙神界をも越えて、はるかなる宇宙の奥、さらには外宇宙へと昇る道でもある。その神界コースの道案内をしているのがこの書物である。

平成六年六月一日　著者記す